

統合的レベル分類と存在論

横山 幹子 (Mikiko Yokoyama)

所属 筑波大学図書館情報メディア系

存在論は図書館情報学とどのように関係しているのか。図書館情報学研究にとってどのような存在論が適切なのか。その問題に関して Birger Hjørland (Hjørland, 2019) と Claudio Gnoli (Gnoli, 2018) の間に論争がある。その論争は、図書館情報学の中でも特に「知識の組織化」に焦点を当てたものである。Hjørland が存在論として一元論をとり「知識の組織化システム」に関して「ドメイン分析」を提案したのに対し、Gnoli は存在論として複数主義をとり「知識の組織化システム」に関して「統合的レベル分類 (Integrative Levels Classification)」を提案した。しかし、「知識の組織化」研究においてどちらの存在論が適切なのかの決定的な答えは出ていない。そして、それらを検討するためには、個々の具体的な「知識の組織化システム」と存在論との関係を詳細に検討する必要がある。(横山, 2020)

「知識の組織化」を専門とする図書館情報学者である Gnoli (Gnoli, 2018) は、「知識の組織化」の理論における存在論的側面が、認識論的側面である方法論に影響を与えていると考えている。また、認識論的側面である方法論に関しては、「個々の知識使用者の個人的経験を強調する」(Gnoli, 2018, p. 1227) 認知的アプローチと「知識を特定の社会的な文脈における言語共同体の表現だと考える」(Gnoli, 2018, p. 1227) 社会学的アプローチを代表的なものとして挙げ、図書館情報学研究ではそれらが対立するものとして考えられてきたが、それらを排他的なものとするのではなく相補うものとするべきであると述べている。そのうえで、そのような方法論についての考えを支えるための存在論は複数主義でなければならないと主張しているのである。具体的には、彼は、Nicloai Hartmann (Hartman, 1949 他) や Karl Popper (Popper, 1979 他) の考えを参照にしながら、存在についてのレベル理論を採用し、Hartmann の「客観化された精神」や Popper の「世界 3」に見られるような、意識によって生み出された存在者、メンティファクト (無形文化遺産) を存在者として認めようとする。Gnoli によれば、そのような生産者から区別されたものとしてのメンティファクトは、認知的アプローチと社会的アプローチが統合されたものによって扱われることができるのである。しかし、そのためには複数主義の存在論が「知識の組織化」において適切であることが示されなければならない。彼によれば、複数主義の存在論は「知識の組織化」と二つの点で関係しうる。「一つは、研究対象としての情報や知識の地位を評価すること、もう一つは、知識の組織化システム (KOS) においてすべての研究対象を秩序付けること」(Gnoli, 2018, p. 1229) である。それゆえ、この二点において、実際複数主義が重要な役割を果たすか

どうか、具体的な「知識の組織化システム」において明らかにされなければならない。

そのような状況を受けて、本発表の目的は、Gnoli に焦点を当て、彼が提案している「統合的レベル分類」と複数主義がどのように関係しているのか、「総合的レベル分類」が必要としているのはどのような存在者か、そして、「統合的レベル分類」は Hjørland が主張している「プラグマティックな実在論」(Hjørland, 2021 他) とどのように関係するのかを明らかにすることである。

そのために、まず、Gnoli の考える複数主義的な存在論 (Gnoli, 2018 他) がどのようなものなのかを確認する。次に、「統合的レベル (Integrative Levels)」とはどのような考えなのか (Kleineberg, 2017 他)、さらに、「統合的レベル分類」とはどのような分類方法であるのか (ISKO, 2021 他) を示す。それから、「統合的レベル分類」において、複数主義的な存在論がどのように現れているのか (Gnoli, 2008 他) を明らかにする。そして、「総合的レベル」が必要としている存在者がどのようなものでありうるかを検討する。そのうえで、そのような「統合的レベル分類」が、複数主義的な存在論を否定したうえで「知識の組織化」について「ドメイン分析」を行おうとする Hjørland の主張する「プラグマティックな実在論」や、Hjørland の「プラグマティックな実在論」と関係しうると考えられる Putnam の晩年の実在論についての考え (横山, 2022) とどのように関係しうるのかについて論じる。

参考文献

- Gnoli, C. Categories and facets in integrative levels. *Axiomathes*. 2008, vol. 18, p. 177-192.
- Gnoli, C. Mentefacts as a missing level in theory of information science. *Journal of Documentation*. 2018, vol. 74, no. 6, p. 1226-1242.
- Hartman, N. *Neue Wege der Ontologie*. Kohlhammer, 1949.
- Hjørland, B. The foundation of information science: One world or three? A discussion of Gnoli(2018). *Journal of Documentation*. 2019, vol. 75, no. 1, p. 164-171.
- Hjørland, B. Information retrieval and knowledge organization: A perspective from the philosophy of science. *Information*. 2021, vol. 12, no. 3, 135.
<https://doi.org/10.3390/info12030135> (accessed 2020-0804)
- ISKO Italia, Integrative levels classification. 2021.
<http://www.iskoi.org/ilc/> (accessed 2022-0804)
- Kleineberg, M. Integrative levels. *Encyclopedia of Knowledge Organization*. 2017.
https://www.isko.org/cyclo/integrative_levels#2(accessed 2022-0804)
- Popper, K. R. *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*. Rev. ed. Clarendon Press, 1979.
- 横山幹子. 図書館情報学における存在論の対立 : Gnoli の存在論的複数主義と Hjørland の存在論的一元論の比較. *Library and Information Science*. 2020, no. 84, p. 1-21.
- 横山幹子. Hjørland のドメイン分析と存在論 : Putnam 及び Gabriel の存在論との比較. *Library and Information Science*. 2022, no. 87, p. 47-69.
- 本研究は、JSPS 科研費 21K00001 の助成を受けたものです。